

京大 広報

Kyoto University

2018.5
No. 735



目次

〔大学の動き〕

- 副学長が発令される 5008
- 副理事が発令される 5008
- 部局長の交替等 5008
- 退職者功労表彰式を挙行 5013
- 名誉教授称号授与式を挙行 5013
- 京都大学地域講演会（沖縄講演会）および沖縄
大文字会懇親会を開催 5014
- 第13回京都大学附置研究所・センターシンポ
ジウム／京都大学岡山講演会を開催 5015
- 第10回東南アジアネットワークフォーラムを開催 5017
- グローバルユニバーシティ・アドミニストレーション
フォーラムに参加 5018
- 平成30年度概算要求内示概要 5019
- 京都大学重点戦略アクションプラン（2016-2021）
（第3版）着手事業 5025
- 平成29年度大学院学位授与式を挙行 5026
- 平成29年度卒業式を挙行 5028
- 平成30年度学部入学式を挙行 5029
- 平成30年度大学院入学式を挙行 5030
- 「京都大学ポスターセッション2017」を実施 5032
- 株式会社タダノとの包括連携共同研究契約締結
に関する記者発表 5033
- 京都大学ワンストップバイオリソース事業の実施
および株式会社KBBMの設立 5034

〔部局の動き〕

- 総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年
記念式典を開催 5035
- アリゾナ大学水文大気科学科と
部局間学術交流協定を締結 5035

- 総合生存学館（思修館）において、
国際ジョイントシンポジウムを開催 5037
- 高等教育研究開発推進センター、
第24回大学教育研究フォーラムを開催 5038

〔寸言〕

- 大学について思うこと 岡本 一郎 5040

〔随想〕

- 流体力学の啓蒙活動 5042
名誉教授 船越 満明

〔洛書〕

- 京都からの学び 金村 宗 5043

〔榮譽〕

- 丸岡啓二 理学研究科教授が日本学士院賞を受賞 5044
- 堀江 武 名誉教授が学士院賞を受賞 5044

〔話題〕

- 医学部附属病院がISO9001:2015の認証を取得 5046
- 宇治おうばくプラザで「第9回たそがれ花見
コンサート」を開催 5046
- 化学研究所所蔵の「モノビニルアセチレン法に
よる合成ゴム」が化学遺産に認定 5047
- 第13回 TOKYO 漢籍 SEMINAR の開催報告 5048
- 京都大学研究資源アーカイブが新たな資料を公開 5049
- 学部生全員が、胸骨圧迫と AED の使い方を
学びました！ 5051

〔訃報〕

- 坂東 尚周 名誉教授 5052



京都大学



大学
の
動き

副学長が発令される

4月1日付けで副学長が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



国際戦略担当
河野 泰之（新任）



法務・コンプライアンス担当
潮見 佳男（新任）



研究倫理・安全推進担当
野田 亮（新任）

[目次に戻る ↗](#)

副理事が発令される

4月1日付けで副理事が任命されました。任期は平成30年9月30日まで。



桂キャンパス担当
大嶋 正裕（新任）

[目次に戻る ↗](#)

部局長の交替等

（新任）

文学研究科長・文学部長

南川高志 文学系（大学院文学研究科）教授（西洋古代史）が、平田昌司 文学研究科長・文学部長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



大学の
動き

経済学研究科長・経済学部長

江上雅彦 経済学系(大学院経済学研究科)教授(ファイナンス工学, 動学的最適化)が, 文 世一 経済学研究科長・経済学部長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



工学研究科長・工学部長

大嶋正裕 工業化学系(大学院工学研究科)教授(化学工学, 高分子成形加工学, プロセスシステム制御)が, 北村隆行 工学研究科長・工学部長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



アジア・アフリカ地域研究研究科長

玉田芳史 地域研究学系(大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)教授(タイ研究, 比較政治学)が, 太田 至 アジア・アフリカ地域研究研究科長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



情報学研究科長

中村佳正 情報学系(大学院情報学研究科)教授(応用数学)が, 山本章博 情報学研究科長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



公共政策連携研究部長

岩本武和 経済学系(公共政策連携研究部)教授(国際経済学, 国際金融論)が, 中西 寛 公共政策連携研究部長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



経営管理研究部長・経営管理教育部長

原 良憲 経済学系(大学院経営管理研究部)教授(イノベーションマネジメント)が, 若林靖永 経営管理研究部長・経営管理教育部長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



大学の
動き

化学研究所長

辻井敬亘 統合化学系（化学研究所）教授（高分子材料設計・高分子化学）が、時任宣博 化学研究所長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



ウイルス・再生医科学研究所長

小柳義夫 ウイルス・再生医科学系（ウイルス・再生医科学研究所）教授（ウイルス学）が、開 祐司 ウイルス・再生医科学研究所長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



東南アジア地域研究研究所長

速水洋子 地域研究学系（東南アジア地域研究研究所）教授（東南アジア、地域研究、文化人類学、ジェンダー、エスニシティ、宗教）が、河野泰之 東南アジア地域研究研究所長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



こころの未来研究センター長

河合俊雄 地域研究学系（こころの未来研究センター）教授（臨床心理学）が、吉川左紀子 こころの未来研究センター長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



白眉センター長

赤松明彦 文学系（大学院文学研究科）教授（インド哲学）が、光山正雄 白眉センター長の後任として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

※職名は選出時のものです。



学際融合教育研究推進センター長

重田眞義 地域研究学系（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）教授（アフリカ研究）が、中村佳正 学際融合教育研究推進センター長の後任として指名されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



大学の
動き

大学院横断教育プログラム推進センター長

北野正雄 理事が、大学院横断教育プログラム推進センター長として選出されました。任期は平成30年4月1日から平成30年9月30日まで。



研究連携基盤長

時任宣博 統合化学系（化学研究所）教授（有機元素化学，有機金属化学）が、小柳義夫 研究連携基盤長の後任として指名されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。



環境安全保健機構長

吉崎武尚 工業化学系（国際高等教育院）教授（高分子溶液学）が、大畠幸一郎 環境安全保健機構長の後任として指名されました。任期は平成30年4月1日から平成30年9月30日まで。



国際戦略本部長

河野泰之 地域研究学系（東南アジア地域研究研究所）教授（東南アジア地域研究，農学）が、稲葉カヨ 国際戦略本部長の後任として指名されました。任期は平成30年5月1日から平成30年9月30日まで。



（再任）

薬学研究科長・薬学部長

中山和久 薬学系（大学院薬学研究科）教授（分子細胞生物学）が、薬学研究科長・薬学部長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

人間・環境学研究科長・総合人間学部長

杉山雅人 人間・環境学系（大学院人間・環境学研究科）教授（分析化学・水圏化学）が、人間・環境学研究科長・総合人間学部長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

地球環境学堂長・地球環境学舎長

舟川晋也 生物生産環境学系（大学院地球環境学堂）教授（環境農学・土壌学）が、地球環境学堂長・地球環境学舎長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

大学
の
動き**医学部附属病院長**

稲垣暢也 臨床医学系（大学院医学研究科）教授（糖尿病・内分泌・栄養内科学分野）が、医学部附属病院長に再指名されました。任期は平成30年4月1日から平成31年3月31日まで。

生存圏研究所長

渡邊隆司 生存圏科学系（生存圏研究所）教授（バイオマス変換）が、生存圏研究所長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

経済研究所長

溝端佐登史 統合経済学系（経済研究所）教授（比較経済システム論）が、経済研究所長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

霊長類研究所長

湯本貴和 霊長類野生動物学系（霊長類研究所）教授（保全生態学）が、霊長類研究所長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

iPS細胞研究所長

山中伸弥 iPS細胞学系（iPS細胞研究所）教授（幹細胞生物学）が、iPS細胞研究所長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

学術情報メディアセンター長

中村裕一 情報学系（学術情報メディアセンター）教授（情報メディア工学）が、学術情報メディアセンター長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

高等教育研究開発推進センター長

飯吉 透 全学教員部（高等教育研究開発推進センター）教授（教育イノベーション・高等教育システム）が、高等教育研究開発推進センター長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

アフリカ地域研究資料センター長

重田真義 地域研究学系（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）教授（アフリカ研究）が、アフリカ地域研究資料センター長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

高等研究院長

森 重文 高等研究院特別教授（代数幾何学，双有理幾何学）が、高等研究院長に再任されました。任期は平成30年4月1日から平成32年3月31日まで。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

退職者功労表彰式を挙行

退職者功労表彰式が3月30日(金)に本部棟5階大会議室において開催され、山極壽一 総長、森田正信 理事、中村 一也 総務部長、被表彰者23名が出席しました。

退職者功労表彰は、退職時において勤続年数が30年以上の教職員および有期雇用教職員に対し、その永年にわたる功労を讃えるため創設されたもので、平成29年度末の被表彰者は34名でした。

表彰式では出席の被表彰者の氏名を紹介した後、総長より、代表者に対して表彰状が授与され、祝辞が述べられました。祝辞では、永年本学の発展のために多大な尽力をいただいたこと、今後も引き続きご尽力いただく方を含め、教職員の協力のもと、WINDOW構想を実現していくことに触れ、感謝の言葉が述べられました。

祝辞の後は、各々交流を深められ、和やかな雰囲気の中で式が終了しました。



出席された被表彰者との集合写真

(総務部(人事課))

[目次に戻る](#)

名誉教授称号授与式を挙行

4月5日(木) 午後4時から、百周年時計台記念館において、理事、監事、副学長、副理事、理事補、部局長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行されました。

総長より称号を授与された方は、次の63名です。



氏 名	推 薦 部 局	氏 名	推 薦 部 局
町 田 忍	(理学研究科)	西 尾 嘉 之	(農学研究科)
楠 見 明 弘	(物質-細胞統合システム拠点)	佐々木 節	(基礎物理学研究所)
長 澤 丘 司	(再生医科学研究所)	野 田 亮	(医学研究科)
中 條 善 樹	(工学研究科)	井 波 陵 一	(人文科学研究所)
金 本 龍 平	(農学研究科)	寺 田 浩 明	(法学研究科)
天 野 恵	(文学研究科)	赤 松 明 彦	(文学研究科)
二 木 淑 子	(医学研究科)	宮 本 嘉 久	(人間・環境学研究科)

大学の
動き

氏 名	推 薦 部 局	氏 名	推 薦 部 局
平 原 和 朗	(理学研究科)	氣 多 雅 子	(文学研究科)
家 森 俊 彦	(理学研究科)	田 村 類	(人間・環境学研究科)
矢 野 誠	(経済研究所)	松 本 吉 泰	(理学研究科)
山 岸 常 人	(工学研究科)	鈴 木 茂 彦	(医学研究科)
國 廣 悌 二	(理学研究科)	横 田 冬 彦	(文学研究科)
釜 江 克 宏	(原子炉実験所)	岡 崎 健 二	(地球環境学堂)
成 生 達 彦	(経営管理研究部)	裏 出 令 子	(農学研究科)
小 泉 昭 夫	(医学研究科)	鍵 山 恒 臣	(理学研究科)
北 島 宣	(農学研究科)	杉 島 敬 志	(アジア・アフリカ地域研究研究科)
木 村 恒 久	(農学研究科)	佐 藤 文 彦	(生命科学研究科)
竹 村 恵 二	(理学研究科)	酒 井 治 孝	(理学研究科)
北 野 正 雄	(工学研究科)	今 井 裕	(農学研究科)
若 島 正	(文学研究科)	前 川 平	(医学部附属病院)
三 木 邦 夫	(理学研究科)	石 川 義 孝	(文学研究科)
山 本 豊	(法学研究科)	開 祐 司	(ウイルス・再生医科学研究所)
菅 沼 信 彦	(医学研究科)	高 橋 千太郎	(原子炉実験所)
平 井 啓 久	(霊長類研究所)	一 山 智	(医学研究科)
伊 藤 之 雄	(法学研究科)	田地野 彰	(国際高等教育院)
水 内 亨	(エネルギー理工学研究所)	坪 山 直 生	(医学研究科)
鈴 木 眞知子	(医学研究科)	美 濃 導 彦	(学術情報メディアセンター)
井 手 亜 里	(工学研究科)	新 川 敏 光	(法学研究科)
福 井 清 一	(農学研究科)	皆 藤 章	(教育学研究科)
吉 田 潤 一	(工学研究科)	酒 巻 匡	(法学研究科)
米 原 伸	(生命科学研究科)	中 島 啓	(数理解析研究所)
岡 村 均	(薬学研究科)		

(総務部 (人事課))

[目次に戻る ↗](#)

京都大学地域講演会 (沖縄講演会) および沖縄大文字会懇親会を開催

地域講演会は、これまで蓄積してきた知的財産や現在進行中の教育研究活動の成果等を全国に紹介し、広く社会に還元することを目的として1997年から開催しているものです。

このたびは、3月21日(水)に那覇市の沖縄県青年会館において、京都大学沖縄講演会「“秘められた”海底ケーブル—沖縄から見る東アジアとの関係」を開催しました。

講演会では、まず、稲葉カヨ 理事・副学長が本学を代表して開会の挨拶を行い、沖縄で開催する運びとなったこ



挨拶する稲葉理事・副学長 (講演会)

大学の
動き

とに謝意を述べました。その後の講演では、貴志俊彦 東南アジア地域研究研究所教授が、1979年に沖縄と台湾の間に開通した海底ケーブル布設から見てくる、当時の東アジア域内の構造的変化や世界との関係性の変化について詳しく説明し、1970年代を研究することで現代が見えてくると話しました。講演会には124名の参加があり、講演後の質疑応答でも参加者がそれぞれの立場で熱心に意見を述べ、積極的に質問して意見交換を行い、本学の研究活動の一端に触れる機会となりました。



講演する貴志教授（講演会）

参加者からは、「国際間ケーブルの接続における政治的、地理的な背景を聞けてとても勉強になった」、「一見、技術の話かと思われたが、歴史、しかもほんの数十年前の産業史の話で、沖縄もからんで興味深かった」などの感想が寄せられました。

また、講演会終了後、同会館内において、沖縄大文字会との懇親会が開催されました。本学からは稲葉理事・副学長、徳賀芳弘 副学長、貴志教授および大学関係者が出席しました。最初は大城 清 会長（医学部・1973年卒）および徳賀副学長の挨拶があり、続いて、屋比久盛敏 事務局長（農学部・1983年卒）の乾杯の発声により開宴となりました。和やかな交流が進み、全員で「逍遙の歌」を斉唱し、稲葉理事・副学長の結びの挨拶により、盛会のうちに閉会となりました。



会場の様子（講演会）



集合写真（沖縄大文字会）

（総務部（渉外課））

[目次に戻る](#)

第13回京都大学附置研究所・センターシンポジウム／京都大学岡山講演会を開催

京都大学附置研究所・センターシンポジウム／京都大学岡山講演会「京都からの挑戦—地球社会の調和ある共存に向けて」（主催：京都大学，京都大学研究連携基盤，後援：岡山県教育委員会，読売新聞社）を3月17日（土）に開催しました。

本シンポジウムは、基礎研究において独自の研究業績を持つ本学の20の研究所・センターが、それらの成果を社会に還元することを目的として、2006年から毎年1回各主要都市で開催しているものです。第13回となる今回は、「京大起春風（きょうだいはるかぜをおこす）」をテーマに開催しました。また、今回のシンポジウムは、本学がこれまで蓄積してきた知的資源や現在進行中の教育研究活動の成果等を広く社会に還元することを目的として1997年から全国で展開し

大学の
動き

てきた京都大学地域講演会としても位置付けて、開催しました。

シンポジウムでは、まず、山極壽一 総長が本学を代表して開会の挨拶を行いました。その後の講演では、竹広真一 数理解析研究所准教授、林 美里 霊長類研究所助教、松田一成 エネルギー理工学研究所教授、森 信介 学術情報メディアセンター教授、高橋修平 経済研究所准教授、原田 浩 放射線生物研究センター教授、Easan Sivaniah 高等研究院物質—細胞統合システム拠点教授が、それぞれの研究成果を発表しました。講演後には、参加者から寄せられた質問に講演者が答える形式で行われ、参加者は講演で紹介された研究内容への理解を深めました。

次に、パネルディスカッションでは、吉川左紀子 こころの未来研究センター長の司会により、山極総長、小柳義夫 研究連携基盤長、ならびに研究連携基盤の多彩な学術領域をベースにしたボトムアップ的な新学術領域を創成するために設置された4つの未踏科学研究ユニットのユニット長が、「挑戦の意味、失敗の意味—未踏科学研究ユニットはどこへ向かうのか」と題して意見交換を行いました。



開会挨拶する山極総長



講演者の竹広准教授



講演者の林助教



講演者の松田教授



講演者の森教授



講演者の高橋准教授



講演者の原田教授



講演者の Easan 教授



パネルディスカッションの様子



会場の様子

大学の
動き総括および閉会の挨拶をする
小柳研究連携基盤長

最後に、小柳研究連携基盤長が総括および閉会の挨拶を行い、シンポジウムは終了となりました。当日は、公募による参加者のほか、岡山県内の高校生団体68名など合わせて511名の参加があり、熱心に耳を傾けました。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

第10回東南アジアネットワークフォーラムを開催

タイ・バンコクにて第10回東南アジアネットワークフォーラムを京都大学タイ人同窓会京都ユニオンクラブ(KUC)、モンクット王ラカバン工科大学、泰日工業大学と2月24日(土)に共催しました。

ASEAN拠点開設(2014年6月)以降、4回目のバンコク開催となった今回のフォーラムは「Bioenergy Conversion Technologies and their Application: Moving towards Sustainability」をテーマに、延べ参加者数が180名を超える盛況なフォーラムとなりました。

東南アジアネットワークフォーラムは、元留学生が組織する同窓会と連携し、現地における社会的関心・ニーズの高い内容を学術テーマとして、本学の最新研究成果を還元するとともに、同窓生のネットワークの強化を目指すものです。

フォーラムの開会にあたり、寺島史朗 在タイ日本国大使館一等書記官、稲葉カヨ 理事・副学長の挨拶に続いて、坂 志朗 エネルギー科学研究科特任教授、Kajornsak Faungnawakij氏(National Nanotechnology Center, National Science and Technology Development Agency), Thevarak Rochanapruk氏(United Power of Asia Public Company limited)等による基調講演を行いました。午後からは、石原慶一 エネルギー科学研究科教授によるJASTIP紹介の後、“21st Energy Outlook – Moving towards Sustainable Society”をテーマにパネルディスカッションを行い、石原教授、Jose V. Camacho, Jr. University of the Philippines, Los Baños (UPLB) 大学院長、Boonrod Sajjakulnukit氏(King Mongkut's University of Technology Thonburi), 古川善規 New Energy and Industrial Technology



挨拶する稲葉理事・副学長



パネルディスカッション “21st Energy Outlook – Moving towards Sustainable Society”

大学の
動き

Development Organization バンコク事務所長等による意見交換が行われました。

また、京都大学フィリピン同窓会会長であるJose V. Camacho, Jr. 大学院長ほか3名の同窓生を招聘し、フィリピンで来年度開催予定のフォーラムや、同窓会のさらなる充実等についての意見交換を行いました。

フォーラム後には、KUC、フィリピン同窓会との交流会が開催され、25名の参加がありました。大盛況であったフォーラムを振り返りながら、それぞれの近況を報告し合うなど、終始和やかな雰囲気会の会となりました。



京都大学フィリピン同窓会との打合せ



KUC、京都大学フィリピン同窓会との交流会

(企画・情報部(企画課))

[目次に戻る](#)

グローバルユニバーシティ・アドミニストレーション フォーラムに参加

Korea Advanced Institute of Science and Technology (KAIST) が開催したグローバルユニバーシティ・アドミニストレーションフォーラムに、森田正信 理事が参加し、基調講演を行いました。

本フォーラムは「KAIST 2031 Vision Week」の一環として、大学職員の人材マネジメントや事務組織の取り組みについて、世界各国の先進的な大学の間で情報を交換し、大学運営の発展に貢献することを目的として開催されました。主催校であるKAISTに加え、ジョージア工科大学、デンマーク工科大学、そして京都大学の3校が参加しました。

フォーラムの開会にあたり、KAISTのKi-Han Kim 理事補の開会挨拶、O Ok Park プロボストによる祝辞に続いて、KAISTにおける事務組織発展に向けた取り組みについて講演が行われました。その後、デンマーク工科大学のAnders Jakobsen 人材開発部長、ジョージア工科大学のPaul Kohn 副プロボストの基調講演に続いて、森田理事が「Human Resource management of non-academic staff at Kyoto University」と題した基調講演を行い、本学における事務組織の最新の取り組みについて紹介しました。



Park プロボストとの記念写真



基調講演を行う森田理事

大学の
動き

その後、講演内容についてパネルディスカッションを行い、KAISTのパネリストとの間で意見交換が行われました。また、フォーラム参加者からの質疑応答も行われ、大学事務組織の在り方や人材育成に関して活発な議論が繰り広げられました。



パネルディスカッションの様子

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る](#)

平成 30 年度概算要求内示概要

1. 大学院・学部組織整備計画

部局名	事項(事業)名
医学部	医学部人間健康科学科の組織再編(2年次学士入学の導入)
薬学部	薬学部薬学科・薬科学科の整備

2. 機能強化経費等

①機能強化促進分：

- ・4つの戦略、18件の取組からなる本学の機能強化の方向性に応じた取組構想に対し、機能強化経費(機能強化促進分)等が措置されました。

②基幹経費化分：

- ・7件の取組について、新たに基幹経費化が認められました。

部局名	区分	事項(事業)名	新規/ 継続	備考
戦略①：独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出				
教育学研究科	組織整備	社会変革にตอบสนองする学際教育学研究拠点の形成—融合型研究組織による新たな挑戦—	新規	
生命科学研究科	組織整備	生命科学研究科、放射線生物研究センターの統合によるシステム生物学の推進	新規	
ウイルス・再生医科学研究所	組織整備	個体の中の細胞社会学の確立と応用—新世代細胞療法へ向けて—	継続	
高等研究院	組織整備	国内外の卓越した研究者の英知集結ハブとなる国際研究拠点の機能強化	継続	

大学の
動き

部局名	区分	事項（事業）名	新規 / 継続	備考
東南アジア地域研究研究所	プロジェクト	組織統合による革新的生存基盤研究の体制整備	継続	
ウイルス・再生医科学研究所	プロジェクト	多階層生命システム創生研究 — 共同利用・共同研究拠点を拠点を据えたイノベーションの開拓 —	継続	
霊長類研究所	プロジェクト	ヒトの進化の霊長類の基盤に関する国際共同研究の戦略的推進 — ポストゲノム時代の総合霊長類学の先端研究 —	新規	基幹経費化
理学研究科 工学研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科 生存圏研究所 防災研究所 事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター））	プロジェクト	宇宙開発利用を担うグローバル人材育成のための宇宙学拠点の構築	継続	
医学研究科 医学部附属病院	プロジェクト	ヒト試料・情報を活用する研究環境および高度国際人材育成モデルの構築事業— 医学・物理・数理科学分野の知の結集による革新的疾患総合医科学「Diseasomics（ディージョミクス）」の創成 —	継続	基幹経費化
薬学研究科	プロジェクト	化学・生物学分野融合による価値創造型創薬研究拠点の構築 — 薬・工・医連携創薬テクノロジーイノベーションプロジェクト —	継続	基幹経費化
iPS 細胞研究所	プロジェクト	iPS 細胞研究拠点形成事業 — iPS 細胞の早期実用化への取り組み —	継続	基幹経費化
事務本部（企画・情報部）	プロジェクト	京都大学附置研究所・センター群の連携強化によるイノベーション創出プロジェクト	継続	
戦略②：学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す国際通用性の高い教育システムの構築				
理学研究科	プロジェクト	数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム	継続	
事務本部（教育推進・学生支援部）	プロジェクト	高大接続型「京都大学特色入試」の導入およびアドミッション・オフィス機能の強化	継続	
情報学研究科 事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター））	プロジェクト	学部・大学院共通情報教育の革新と教育情報化によるグローバル人材の育成	継続	
高等教育研究開発推進センター	プロジェクト	ICT（情報コミュニケーション技術）を活用した教育の国際化とエビデンスデータに基づいた教育改革のための支援基盤強化	継続	基幹経費化

大学の
動き

部局名	区分	事項（事業）名	新規 / 継続	備考
戦略③：世界標準の教育研究環境の構築と多様なグローバル人材育成				
文学研究科 経済学研究科	組織整備	文学研究科修士課程 京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻（ジョイント・ディグリー）の設置	新規	
医学研究科	組織整備	大学院医学研究科博士課程京都大学・マギル大学ゲノム医学国際連携専攻（ジョイント・ディグリー）の設置	新規	
事務本部（教育推進・学生支援部） 国際高等教育院	組織整備	Kyoto University International Undergraduate Program (Kyoto iUP)	新規	
エネルギー科学研究科 エネルギー理工学研究所	プロジェクト	国際先端エネルギー科学研究教育センター国際共同ラボの形成 ーオンサイトラボラトリーおよびダブルディグリー推進体制の強化ー	新規	
医学研究科	プロジェクト	地域連携医薬コンソーシアムの形成による高度研究支援促進と研究支援人材育成事業	継続	
法学研究科	プロジェクト	国際競争力・貢献力ある法学研究者養成拠点の形成	継続	
アジア・アフリカ地域研究研究科 アフリカ地域研究資料センター	プロジェクト	海外拠点の機能強化による「アジア・アフリカ地域対応の高度グローバル人材育成」事業	継続	基幹経費化
地球環境学堂 工学研究科 農学研究科 人間・環境学研究科	プロジェクト	海外サテライト形成による ASEAN 横断型環境・社会イノベーター創出事業	継続	基幹経費化
戦略④：グローバル化に対応した産官学連携および最先端で質の高い医療の開発・提供等による社会貢献事業の推進				
医学研究科	組織整備	組織再編による多様な高度医療専門職人の養成 ー医学物理士・臨床研究管理者・医療ビッグデータサイエンティスト等の養成ー	継続	

大学の
動き

【参考】機能強化の取組構想 イメージ図

京都大学における取組構想



ビジョン = 将来構想 (WINDOW構想)			
総長のリーダーシップによる学内改革の推進 ・教育研究組織改革 (学域・学系制の導入、研究連携基盤) ・人事・給与システムの弾力化 (年俸制、クロスアポイントメント制度の導入) ・IRを活用した大学運営 ・特色入試の実施 等			
第3期における機能強化の方向性 (重点支援③) に応じた取組			
【戦略①】 独創的な先端研究・融合研究の推進による 学術・社会のイノベーション創出	【戦略②】 学生に主体性の発揮と質の高い学修を促す 国際通用性の高い教育システムの構築	【戦略③】 世界標準の教育研究環境の構築と多様な グローバル人材育成	【戦略④】 グローバル化に対応した産官学連携及び 最先端で質の高い医療の開発・提供等による 社会貢献事業の推進
【評価指標】 - 国際共著論文数の増加状況 (H27年:2,306本 → H30年:2,500本) - 国際的に評価の高いジャーナル (TOP5%) への掲載論文数の増加状況 (H27年:721本 → H30年:800本) - 異分野共著論文数の増加状況 (H27年:2,492本 → H30年:3,000本) - 人文社会分野のジャーナルへの掲載論文数の増加状況 (H27年:505本 → H30年:550本) - 科学研究費助成事業採択の向上状況 (H26年度:494件 → H30年度:543件) ※基礎研究 (S・A・B・C) 新規採択件数 - 研究支援充実のための専任職員の増加状況【URA】 (H26年度末:40人 → H33年度末:50人) 【外国語力基盤を満たす専任職員】 (H26年度末:77人 → H33年度末:120人) - 共同研究・受託研究実施件数・金額の増加状況【共同研究】 (第2期平均:824件・4,183百万円 → H33年度:1,030件・6,275百万円) 【受託研究】 (第2期平均:881件・16,627百万円 → H33年度:1,101件・24,941百万円) - 若手研究者の海外派遣者数の増加状況 (H27年度:1,484人 → H33年度:1,800人) - 未踏科学への取組等の推進状況 (H27年度末:40件 → H33年度末:40件以上) ※異分野融合によるユニット等の組織数	【評価指標】 - インターネットを活用したデジタル教材数の増加状況【OCW】 (H26年度末:535件 → 毎年度新たに50件増加) 【MOOCs】 (H26年度末:1件 → 毎年度新たに2件開講) - 学部における科目ナンバリングの導入状況 (H27年度末:7.5% → H29年度以降:100%) - 部局横断型の教育プログラムの実施状況 (H27年度:64科目 → H28年度以降:64科目以上) - 履修証明プログラム数の増加状況 (H27年度末:3件 → H33年度末:6件) - アクティブラーニングの手法を取り入れた人数による課題探究型科目数の増加状況 (H27年度:197科目 → H28年度以降:300科目) ※ILAS2モニター数 - 特色入試による入学人数の増加状況 (H28年度:81人 → 第3期末までに増加)	【評価指標】 - 学士課程1・2年次を対象とする英語による基礎・教養科目の増加状況 (H26年度:134科目 → H33年度:400科目) - 外国人教員等の増加状況 (H27年度末:376人 → H33年度末:500人) - 国際共同学位プログラム(ジョイント/ダブルディグリー)プログラムの増加状況 (H26年度末:7件 → H33年度末:14件) - 外国人留学生受入数の増加状況 (H26年度:2,441人 → H33年度:3,300人) - 中長期及び短期の海外留学生数の増加状況 (H26年度:1,517人 → H33年度:1,600人) - 大学間学術交流協定締結校数の増加状況 (H26年度末:142校 → H33年度末:200校) - 国際共同研究の推進状況 (H26年度:972件 → H33年度:1,050件) ※共同研究を目的とした中長期の海外派遣/受入件数	【評価指標】 - 海外企業・政府機関等との共同研究・受託研究の実施件数・金額の増加状況 (第2期平均:22件・60,500千円 → H33年度:33件・121,000千円) - 知的財産収入額の増加状況【特許】 (第2期平均:261,595千円 → H33年度:392,392千円) 【著作・マテリアル】 (第3期平均:27,154千円 → H33年度:40,730千円) - 本学の研究成果を活用したベンチャー企業数の増加状況 (第2期中:25社 → 第3期中:新たに40社) - がんゲノム情報と時系列臨床情報の統合ビッグデータ構築による登録症例数の増加状況 (H27年度末:0件 → H33年度末:500件) - がん医療の社会実装のための新たなガイドライン等の作成状況 (H27年度末:0件 → H33年度末:8ガイドライン 10件、標準作業手順書 20件) - 先進医療・先端医療の新規実施件数の増加状況 (H27年度末:17件 → H33年度末:27件) - オープンアクセスの推進に伴う京都大学学術情報リポジトリ KURENAI への論文登録数の増加状況 (H27年度末:141,686件 → H33年度末:20万件)
【主な学内の取組】 - 海外派遣事業 (ジョイントプログラム) - 次世代研究者育成支援 (白雲プロジェクト) - 研究支援体制の整備 (URA) - 高等教育院の設置 【主な補助金の取組】 - 研究大学強化促進事業 【重点支援の取組】 関連する教育研究組織整備・プロジェクト	【主な学内の取組】 - 入試制度改革 (特色入試) の実施 - OCW、MOOCs等ICTを活用した教育の充実 - 国際高等教育院附属国際学術言語教育センター (AIRFC) による言語教育 【主な補助金の取組】 - 博士課程教育リーディングプログラム 【重点支援の取組】 関連する教育研究プロジェクト	【主な学内の取組】 - 海外派遣事業 (ジョイントプログラム) - 海外全学拠点の設置 【主な補助金の取組】 - スーパーグローバル大学等事業 - 博士課程教育リーディングプログラム 【重点支援の取組】 関連する教育研究組織整備・プロジェクト	【主な学内の取組】 - 大学院ベンチャー育成事業 - 国内外の企業や研究機関との組織対称型包括連携協定の締結 - 京都・大学キャンパス計画 【主な補助金の取組】 - 活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション拠点 - KYOTO未来創造拠点整備事業 【重点支援の取組】 関連する教育研究組織整備・プロジェクト

③共通政策課題分：

35件の取組等について、機能強化経費 (共通政策課題分) が措置されました。

部局名	事項 (事業) 名	新規 / 継続	備考
全国共同利用・共同実施分 【拠点認定に伴う経費】			
化学研究所	化学関連分野の深化・連携を基軸とする先端・学際グローバル研究拠点形成	継続	
人文科学研究所	人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点	継続	
ウイルス・再生医科学研究所	再生医学・再生医療の先端融合的共同研究	継続	
ウイルス・再生医科学研究所	ウイルス感染症・生命科学先端融合的共同研究拠点事業	継続	
エネルギー理工学研究所	ゼロエミッションエネルギー研究拠点活動の強化	継続	
生存圏研究所	生存圏科学の共同利用・共同研究拠点機能の強化	継続	
防災研究所	自然災害に関する総合防災学の共同利用・共同研究推進事業	継続	
基礎物理学研究所	基礎物理学の発展を目指す国際連携型全国共同研究	継続	
経済研究所	先端経済理論の国際的共同研究拠点	継続	
数理解析研究所	数理解析共同研究と滞在型共同研究の推進	継続	
複合原子力科学研究所	複合原子力科学の有効利用に向けた先導的研究の推進	継続	
霊長類研究所	霊長類研究を基にした国際共同研究拠点の推進	継続	

大学の
動き

部局名	事項（事業）名	新規/ 継続	備考
東南アジア地域研究研究所	東南アジア研究の国際共同研究拠点	継続	
東南アジア地域研究研究所	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進	継続	
生命科学研究科	放射線分子生物学の研究推進拠点	継続	
生態学研究センター	生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点の形成	継続	
野生動物研究センター	生息地保全と環境教育を振興する野生動物研究に関する国際研究拠点	継続	
全国共同利用・共同実施分 【プロジェクト分】			
経済研究所	先端政策分析研究推進事業（第Ⅲ期） —エビデンスベース・ポリシーの推進により豊かな生活を実現する新経済社会システムの構築—	継続	
化学研究所	統合物質創製化学研究推進機構	継続	
化学研究所 エネルギー理工学研究所 生存圏研究所	グリーンイノベーションに資する高効率スマートマテリアルの創製研究 —アンダーワンルーフ型拠点連携による研究機能と人材育成の強化—	継続	
エネルギー理工学研究所	革新的高効率太陽光利用技術の開発 —ゼロエミッション文明への変革を加速する—	継続	
生存圏研究所	生存圏科学の国際化とイノベーション強化	継続	
基礎物理学研究所	重力物理学の国際拠点形成	継続	
数理解析研究所	最先端数学の研究力を強化する新しい幾何学の創造 —数学における主導的地位の確立—	継続	
複合原子力科学研究所	量子ビームと核科学の革新的複合利用による先端物質科学・分析研究拠点の構築	継続	
東南アジア地域研究研究所	日 ASEAN 協働による超学際生存基盤研究の推進	継続	
事務本部（企画・情報部（学際融合教育研究推進センター）） 文学研究科 教育学研究科 法学研究科 経済学研究科 人間・環境学研究科 情報学研究科 人文科学研究科 経済研究所 東南アジア地域研究研究所 こころの未来研究センター	エビデンス・ベース社会の構築に向けた人文社会科学の学際融合・最先端研究人材養成事業 —ニーズからシーズへ—	継続	
設備サポートセンター分			
医学研究科	設備サポートセンター整備	新規	
教育関係共同実施分			
農学研究科	次世代の農と食とエネルギーを創るグリーンエネルギーファーム教育拠点	継続	

大学の
動き

部局名	事項（事業）名	新規 / 継続	備考
フィールド科学教育研究センター	黒潮海域における海洋生物の自然史科学に関するフィールド教育共同利用拠点整備事業	継続	
フィールド科学教育研究センター	日本海における水産学・水圏環境学フィールド教育拠点形成事業	継続	
フィールド科学教育研究センター	人と自然のつながりを学ぶ森林フィールド教育共同利用拠点	継続	
附属病院機能強化分			
医学部附属病院	附属病院における教育研究機能充実支援経費	—	
数理・データサイエンス教育強化経費			
事務本部（教育推進・学生支援部）	データ科学イノベーション教育研究センター構想—21世紀のイノベーションを支える人材育成—	継続	
若手人材支援経費			
事務本部（研究推進部）	若手人材支援経費	—	

3. 病院特別医療機械設備（財政投融資設備）

部局名	事項（事業）名
医学部附属病院	リニアック放射線治療システム
医学部附属病院	消化器内視鏡システム
医学部附属病院	外科内視鏡システム

4. 施設整備費

〈平成 30 年度当初予算〉

団地等名	事業名	構造・階面積	新規 / 継続	備考
医病	基幹・環境整備（受変電設備・給水設備等）	—	新規	
吉田	総合研究棟改修（ウイルス・再生研）	R 4,620m ²	新規	
犬山	実験研究棟改修（霊長類研究所）	R 1,500m ²	新規	
宇治	ライフライン再生（ガス設備）	—	継続	
桂	図書館	R3-1 4,470m ²	継続	
医病	基幹・環境整備（シールドルーム整備等）	—	継続	
医病	総合高度先端医療病棟（Ⅱ期）等	—	継続	
吉田	総合研究棟改修（農学部総合館）施設整備等事業（PFI 事業 13-13）	—	継続	
桂	総合研究棟Ⅲ（物理系）等施設整備事業（BOT）（PFI 事業 12-7）	—	継続	
吉田	総合研究棟（医薬系）（PFI 事業 13-2）	—	継続	

大学の
動き

〈平成 29 年度補正予算〉

団地等 名	事業名	構造・階 面 積	新規 / 継続	備考
吉田	講堂耐震改修	S,R	新規	

(財務部(財務課))

[目次に戻る ↗](#)

京都大学 重点戦略アクションプラン (2016-2021) (第3版) 着手事業

事業名	着手年度
Wild and Wise	
ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業 —日本人学生と外国人留学生が共に学ぶ場としての短期プログラム創設—	28 年度
Go! Research, Learning & Language Program (GoRiLLa) ゴー! リサーチ, ラーニング & ランゲージプログラム (ゴリラプログラム)	28 年度
京都大学ジャパングートウェイ構想推進支援事業	28 年度
Kyoto University International Undergraduate Program (Kyoto iUP)	29 年度
京都大学大学院共通教育実施事業	29 年度
International and Innovative	
国際性豊かな環境整備事業	28 年度
全学海外拠点 (グローバル人材育成: ジョン万プログラム (職員)) 展開事業	28 年度
国際学術ネットワーク強化推進事業	28 年度
国際化業務推進強化事業	28 年度
設備整備・共用促進を通じた質の高い教育研究基盤構築事業	30 年度
研究支援体制高度化事業	28 年度
次世代研究者育成支援事業	28 年度
研究活動推進事業	28 年度
先導的研究拠点形成事業	28 年度
オープンアクセス推進事業	28 年度
戦略的広報を通じた国際競争力強化事業	28 年度
産官学連携の新しい「京大モデル」構築事業	30 年度
戦略的情報発信の推進事業	28 年度
臨床研究拠点における支援体制の強化	28 年度
Natural and Noble	
施設・環境マネジメント推進事業	28 年度
桂キャンパス整備事業	28 年度
KUINS ネットワークの館内・末端 S W の更新事業	29 年度
利益相反マネジメント推進事業	28 年度

大学の
動き

事業名	着手年度
Diverse and Dynamic	
留学生宿舍等整備事業	28年度
指定国立大学法人構想推進事業	30年度
IRを活用した大学運営に向け必要となる体制等の強化	29年度
教学運営を支える教育情報活用（教育IR）推進事業	28年度
障害のある学生への支援体制強化事業	29年度
障害者雇用促進事業（京都大学業務支援室の設置）	30年度
Original and Optimistic	
「高大接続改革実行プラン」を視野に入れた、高大接続事業および入学者選抜方法の検討を行う「高大接続・入試センター」の設立ならびに強化	28年度
高大接続による知的卓越人材育成事業（ELCAS）の推進及び新規展開	30年度
経済的學生支援強化事業	28年度
博士後期課程 特定進学支援制度（KSPD）の創設	29年度
京都大学基金寄付募集活動推進事業	28年度
全学同窓会支援・卒業生連携強化のための推進事業	28年度
Women and the World	
男女共同参画推進事業	28年度

（財務部（財務課））

[目次に戻る](#)

平成 29 年度大学院学位授与式を挙行

3月26日（月）午後2時から、京都市勧業館みやこめっせにおいて、各理事・副学長、各部長等出席のもと、平成29年度大学院学位授与式が挙行されました。

山極壽一 総長が、修士、修士（専門職）、法務博士（専門職）、課程博士、博士課程リーディングプログラム、論文博士の代表者に学位記を授与しました。

その後、総長の式辞があり、午後3時20分に終了しました。



総長式辞



学位授与

大学の
動き

各学位授与者数の内訳は以下の通りです。

修士

学位名	学位授与者数
修士（文学）	86
修士（教育学）	36
修士（法学）	20
修士（経済学）	40
修士（理学）	286
修士（医科学）	26
修士（人間健康科学）	58
修士（薬科学）	58
修士（工学）	726
修士（農学）	296
修士（人間・環境学）	150
修士（エネルギー科学）	127
修士（地域研究）※	25
修士（情報学）	164
修士（生命科学）	67
修士（総合学術）※	9
修士（地球環境学）	33
合 計	2,207

修士（専門職）

学位名	学位授与者数
社会健康医学修士（専門職）	32
公共政策修士（専門職）	42
経営学修士（専門職）	77
合 計	151

法務博士（専門職）

学位名	学位授与者数
法務博士（専門職）	129

※修士（地域研究）および修士（総合学術）は、一貫制博士課程の修士修了相当授与者のみ

博士

学位名	学位授与者数								
	平成29年11月24日付け			平成30年1月23日付け			平成30年3月26日付け		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士（文学）	3	3	6	0	1	1	19	2	21
博士（教育学）	0	0	0	1	1	2	11	2	13
博士（法学）	0	0	0	0	0	0	10	0	10
博士（経済学）	1	0	1	2	0	2	17	1	18
博士（理学）	4	1	5	2	0	2	85	0	85
博士（医学）	4	2	6	23	5	28	58	13	71
博士（医科学）	1	0	1	2	0	2	8	1	9
博士（社会健康医学）	0	0	0	0	0	0	4	1	5
博士（人間健康科学）	1	0	1	1	1	2	8	1	9
博士（薬学）	0	0	0	0	0	0	4	1	5
博士（薬科学）	0	0	0	0	0	0	9	0	9
博士（工学）	6	0	6	2	2	4	76	5	81

大学の
動き

学位名	学位授与者数								
	平成29年11月24日付け			平成30年1月23日付け			平成30年3月26日付け		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士（農学）	7	0	7	2	5	7	35	6	41
博士（人間・環境学）	2	0	2	2	0	2	21	0	21
博士（エネルギー科学）	2	0	2	0	0	0	9	0	9
博士（地域研究）	0	0	0	0	0	0	9	0	9
博士（情報学）	2	0	2	0	0	0	15	2	17
博士（総合学術）※1							1	0	1
博士（生命科学）	4	2	6	2	0	2	7	0	7
博士（総合学術）※2							5	0	5
博士（地球環境学）	0	0	0	1	0	1	9	0	9
合 計	37	8	45	40	15	55	420	35	455

※1：情報学研究科修了 ※2：総合生存学館修了

博士課程教育リーディングプログラム

プログラム名	プログラム修了者数
グローバル生存学大学院連携プログラム	10
充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム	1
デザイン学大学院連携プログラム	6
霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院	1
合 計	18

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る](#)

平成29年度卒業式を挙行

3月27日（火）午前10時から、京都市勧業館みやこめっせにおいて、井村裕夫 元総長、長尾 真 元総長、松本 紘 前総長をはじめ、各理事・副学長、各部局長等の出席のもとに、



学位記授与



総長式辞

大学の
動き

平成29年度卒業式が挙行されました。学歌斉唱に引き続き、山極壽一 総長が各学部代表に学位記を授与しました。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時35分に終了しました。新学士の内訳は以下の通りです。

学士

学位名	学位授与者数
学士（総合人間学）	123
学士（文学）	214
学士（教育学）	71
学士（法学）	293
学士（経済学）	265
学士（理学）	301
学士（医学）	110
学士（人間健康科学）	146
学士（薬学）	31
学士（薬科学）	54
学士（工学）	953
学士（農学）	310
合 計	2,871

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る ↗](#)

平成30年度学部入学式を挙行

4月6日（金）午前9時30分から、京都市勧業館みやこめっせにおいて松本 紘 前総長をはじめ、各理事・副学長、各部局長等の出席のもとに平成30年度学部入学式が挙行されました。

京都大学交響楽団の演奏、合唱団による学歌斉唱に続き、総長の式辞があり、午前9時55分に終了しました。

今年度の入学者数は次ページのとおりです。



山極総長式辞



入学式会場風景

大学の
動き

平成 30 年度 学部入学者数

入試区分名	一般入試 (前期)	外国学校 出身者 選抜	外国人 留学生 特別選抜	学士入学	再入学	特色入試	編入学	合計
総合人間学部	118		2	2	1	5		128
文学部	213		2		1	10		226
教育学部	56		1			5	6	68
法学部	309	6	1			21	5	342
経済学部	220	7	7		1	19	6	260
理学部	311					5		316
医学部（医学科）	106					3		109
医学部（人間健康科学科）	81			1		27		109
薬学部	78		2			6		86
工学部	941		37		1	16	7	1,002
農学部	302		3			10		315
合 計	2,735	13	55	3	4	127	24	2,961

（教育推進・学生支援部（教務企画課））

[目次に戻る](#)

平成 30 年度大学院入学式を挙行

4月6日（金）午後2時から、京都市勧業館みやこめっせにおいて、長尾 真 元総長をはじめ、各理事・副学長、各部局長等の出席のもとに平成30年度大学院入学式が挙行されました。

京都大学交響楽団の演奏、合唱団による学歌斉唱に続き、総長の式辞があり、午後2時25分に終了しました。

今年度の入学者数は、次のとおりです（内訳は、平成30年4月1日現在）。

平成 30 年度 修士課程入学者数

	日本人	留学生	合 計
文学研究科	79	21	100
教育学研究科	38	9	47
法学研究科	5	12	17
経済学研究科	14	20	34
理学研究科	295	13	308
医学研究科（医科学専攻）	21	4	25
医学研究科（人間健康科学系専攻）	60		60
薬学研究科	65	7	72
工学研究科	688	77	765
農学研究科	292	13	305
人間・環境学研究科	118	42	160

大学の
動き

	日本人	留学生	合 計
エネルギー科学研究科	129	6	135
情報学研究科	165	33	198
生命科学研究科	77	3	80
地球環境学舎	34	10	44
合 計	2,080	270	2,350

平成 30 年度 専門職学位課程入学者数

	日本人	留学生	合 計
法学研究科	158		158
医学研究科	39	1	40
公共政策教育部	34	2	36
経営管理教育部	64	27	91
合 計	295	30	325

平成 30 年度 博士（後期）課程入学者数

入学区分名		進学			入学			編入学			再入学		合 計
		日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	留学生	計	日本人	計	
文学研究科	博士後期課程	22	7	29				9	7	16			45
教育学研究科	博士後期課程	14	2	16				3		3			19
法学研究科	博士後期課程	9	7	16				3	2	5			21
経済学研究科	博士後期課程	8	7	15				5	3	8			23
理学研究科	博士後期課程	117	5	122				18	5	23			145
医学研究科	博士後期課程	14	4	18				10	3	13			31
	博士課程(四年) ^{※1}	6	2	8	165	15	180						188
医学研究科 (人間健康科学系専攻)	博士後期課程	8	1	9				13	1	14			23
薬学研究科	博士後期課程	9	2	11									11
	博士課程(四年)				12		12						12
工学研究科	博士後期課程	55	15	70				38	13	51			121
農学研究科	博士後期課程	20	2	22				14	3	17			39
人間・環境学研究科	博士後期課程	38	9	47				22	7	29	1	1	77
エネルギー科学研究科	博士後期課程	6	2	8				5	5	10			18
アジア・アフリカ 地域研究研究科	博士課程(一貫)				23	2	25	5	1	6			31
情報学研究科	博士後期課程	12	5	17				8	6	14			31
生命科学研究科	博士後期課程	10	1	11				5		5			16
地球環境学舎	博士後期課程	2	2	4				4	6	10			14
経営管理教育部	博士後期課程	2		2				5		5			7
総合生存学館	博士課程(一貫)				14	5	19						19
合 計		352	73	425	214	22	236	167	62	229	1	1	891

※1：進学8名は、本学他研究科修士課程又は専門職課程終了後、当該課程に進学した者

大学の
動き



大学院入学式会場風景



山極総長式辞

(教育推進・学生支援部(教務企画課))

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学ポスターセッション 2017」を実施

本年初めての試みである高校生によるポスター発表を、本学主催により百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて3月17日(土)に開催しました。本企画は、高校生が日頃の課題探究活動の成果を府県や学校の枠を越えて披露し、自らの探究心や知的創造力のさらなる向上を目指すものです。全国の国公私立37校・約300名の高校生が参集し、文系理系合わせて62枚の研究ポスターが掲出されました。

当日は、有賀哲也 副学長による開会挨拶では、「ポスターセッションは、参加者が良い聴き手や質問者になることで、発表者の研究を促進することにも繋がります」とのアドバイスがあり、高校生によるポスター発表が開始されました。最初はぎこちなかったプレゼンテーションも時間が経つにつれて落ち着いていき、ポスター前でたくさんの人だかりができていました。その輪の中で高校生同士が、活発に意見交換したり励まし合ったりしながら、研究成果を懸命に伝えようとする姿が印象的でした。

参加した高校生からは、「文系理系が同じ場で発表し交流できたことにとても感激した、京都大学ならではの企画と思う」などの意見がありました。

表彰式では、全体講評として学校法人大阪医科薬科大学 高槻高等学校 工藤 剛 副校長から講話を頂戴しました。

続けて、有賀副学長より優秀ポスター賞3校に対して、賞状並びに記念品を贈呈しました。

いずれの高等学校も非常にレベルの高い探究活動を行っており、ポスターの構成や発表にも



優秀ポスター賞 宮城県仙台第一高等学校



優秀ポスター賞 兵庫県立宝塚北高等学校

大学の
動き

工夫のあとが随所に見られました。参加していた本学関係者からも、驚きの声がたくさん寄せられました。

優秀ポスター賞 受賞校

- 宮城県仙台第一高等学校 「平安貴族は太っていたのか？」
- 兵庫県立宝塚北高等学校 「スクロース（ショ糖）を加熱するとなぜ褐色になるのか」
- 学校法人大阪医科薬科大学 高槻高等学校 「パラオ・日本・ハイチの事例から考える支援の功罪について」



優秀ポスター賞 学校法人大阪医科薬科大学 高槻高等学校

(教育推進・学生支援部(入試企画課))

[目次に戻る ↗](#)

株式会社タダノとの包括連携共同研究契約締結に関する記者発表

京都大学と株式会社タダノは、ICTを建設用クレーン、高所作業車などに全面的に活用することで、建設生産システム全体の安全・生産性向上に貢献する取り組みについて、包括連携共同研究契約を2018年3月1日付けで締結し、4月1日より開始しました。

タダノの主要製品である建設用クレーンや高所作業車は、数ある建設機械の中で



多田野社長と山極総長

も高い機動性を備え、また高所からの視点が得られるなど、ユニークな特性があります。タダノの製品の特性と、京都大学の機械工学・社会工学・都市工学および情報科学等に関する最先端の学術的知見を組み合わせ、建設作業の安全と生産性を向上させるイノベーション創出について、相互に連携・協力していくことを目的として、包括連携共同研究契約を締結しました。

3月7日(水)に東京の丸の内ビルディング内で行われた記者発表では、本学から山極壽一 総長、阿曾沼慎司 理事(産官学連携担当)および北村隆行 工学研究科長が出席し、株式会社タダノからは多田野宏一 代表取締役社長、奥山 環 取締役執行役員専務および多田野有司 執行役員が出席しました。

記者発表では、山極総長および多田野社長の挨拶の後、多田野執行役員より本包括連携共同研究で実施する内容や目的等について説明があり、記者からの質問への対応において、クレーン等の自動化に向けた取り組みなどに関し、その社会的意義やプロセスなどについて説明がありました。

(産官学連携本部))

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き

京都大学ワンストップバイオリソース事業の実施および株式会社 KBBM の設立

京都大学と株式会社エスアールエル、株式会社椿本チエイン、シスメックス株式会社、株式会社アスクレップ、株式会社島津製作所、富士通株式会社および株式会社 SCREEN ホールディングスは、それぞれの事業基盤を活用して高度先端医療に寄与するとともに、ヒト・バイオリソースの利活用による創薬ターゲット、バイオマーカーの探索および統合データベースの開発を実施するため、新たに株式会社KBBMを設立（2018年3月1日）し、「産」 in 「学」の新たな産学連携の取組みとして、京都大学ワンストップバイオリソース事業を実施することといたしました。

3月20日（火）の記者発表では、阿曾沼慎司 理事（産官学連携担当）より、「産」 in 「学」の新たな産学連携の枠組みとそれに伴う京都大学との連携、一般社団法人バイオリソース事業ガバナンスホールディングスによるガバナンス体制について、稲垣暢也 医学部附属病院長より、

医学部附属病院におけるクリニカルバイオリソースセンターの意義等について、それぞれ説明がありました。

続いて、武藤 学 医学研究科教授よりクリニカルバイオリソースセンターの概要やこれからの事業展開について説明があった後、新たに設立された株式会社KBBMの田澤裕光 代表取締役社長より、新会社の概要・事業内容等について説明がありました。

（医学部附属病院，産官学連携本部）



左より 稲垣病院長，阿曾沼理事，田澤社長，武藤教授

[目次に戻る ↗](#)



総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年記念式典を開催

大学院人間・環境学研究科では、3月25日(日)、百周年時計台記念館において、「総合人間学部、人間・環境学研究科設立25周年記念式典」を開催しました。

記念式典では、プレ・シンポジウム、式典、シンポジウムを行い、約二百数十名の教職員、学生および卒業生の参加がありました。

午前に開催したプレ・シンポジウムでは、小島泰雄 副研究科長の司会で「総人、人環の教育経験から得たもの」と題し、卒業生2名(大淵和憲 NPO 法人博多織デベロップメントカレッジ理事、松本啓二郎 大阪教育大学教授)をパネリストに迎え、現役の学生4名(杉谷和哉、近藤望、菊辻みやこ、金澤木綿)と教員1名(阪上雅昭 教授)によるパネルディスカッションを行い、長時間にわたり活発な議論がなされました。

午後から開催した式典では、杉山雅人 研究科長から「人文科学、社会科学、自然科学を融合した新しい学問体系を構築するため、文理融合・連携教育へのこれまでの取り組みに加え、自身の研究成果を一般の人々に分かりやすく伝えることのできる専門家の育成という新たな試みも始めている」との挨拶があり、続いて山極壽一 総長、江島義道 名誉教授から祝辞がありました。山極総長からは、「京都大学では、よりよい未来の創造に寄与するためWINDOW構想を掲げている。総合人間学部、人間・環境学研究科においても、本学の使命を果たすべく文理融合、連携の学際教養教育をととした人材育成により一層努力されることを願います。」との言葉がありました。



式典で挨拶する山極総長

式典終了後に開催したシンポジウムでは、安部 浩 教授の司会で「文理融合・連携の学際・教養教育が目指すもの」と題し、現任教員6名(石川尚人 教授、浅野耕太 教授、桂山康司 教授、酒井 敏 教授、梶丸 岳 助教、佐野泰之 特定助教)によるディスカッションが行われ、文理融合の学際、教養教育の未来と課題について、それぞれの視点から意見が交わされ、有意義なシンポジウムとなりました。

夕刻からは祝賀会を開催し、現任教員と卒業生との積極的な交流が行われ、終始和やかな時間が過ごされ、盛況のうちに終了しました。

(大学院人間・環境学研究科)

[目次に戻る](#)

アリゾナ大学水文大気科学科と部局間学術交流協定を締結

総合生存学館山敷庸亮 教授と宇宙総合学研究ユニット土井隆雄 特定教授は、SPIRITS 研究プロジェクト[宇宙における木材資源の実用性に関する基礎的研究]の一環として、アリゾナ大学(University of Arizona)を訪問し、アリゾナ大学水文大気科学科と大学院総合生存学館との部局間学術交流協定を2月15日に締結しました。また、宇宙総合学研究ユニットとの研究協力についても合意しました。

アリゾナ大学水文大気科学科へは2012年より本学の大学院生が何度か滞在し、同大学で考案された最適化手法(Shuffled complex evolution method (SCE-UA))を開発者のHoshin

部局の
動き

Gupta教授のもとで学んでおり、2017年12月には宇宙総合学研究ユニットの若手派遣プログラムにより総合生存学館大学院生の黒木龍介さんが滞在しました。

アリゾナ大学は、世界で唯一他の惑星の水文学を総合的に行っている大学で、現在は火星のローバーを運用しています。さらに同大学は人類初の隔離生態系実験がなされたバイオスフィア2を運用しています。

また本学で実施している有人宇宙学の実習をアリゾナ大学・バイオスフィア2で開催する構想をバイオスフィア2の副所長のJohn Adams氏や、水文大気科学科長のEric Betterton氏らと始めました。写真中の海や森林はすべてバイオスフィア2内の隔離人工生態系です。

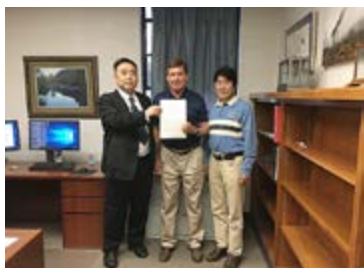
【関連リンク】

アリゾナ大学

<https://hirise.lpl.arizona.edu>

バイオスフィア2

<http://biosphere2.org>



左から、山敷教授、Betterton 科長と、土井特定教授



左から、土井特定教授、Gupta 教授、山敷教授



バイオスフィア2での隔離生態系実験の参加者との撮影



左から、大学院生の黒木さんと Gupta 教授



バイオスフィア2の外観



バイオスフィア2のエネルギー供給センター



バイオスフィア2内部の人工生態系（熱帯雨林と海）



バイオスフィア2内部の人工生態系（熱帯雨林と海）

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る](#)



総合生存学館（思修館）において、国際ジョイントシンポジウムを開催

総合生存学館（思修館）では、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）、早稲田大学および日本貿易振興機構アジア経済研究所（IDE-JETRO）の4機関共催で国際ジョイントシンポジウム「Joint International Economic Symposium on Innovation, Strategy, and Survivability for East Asian Firms in the Globalized World」を3月2日（金）に東一条館思修館ホールにおいて開催しました。

本シンポジウムでは、学内外の教員、大学院生・学部学生や企業に所属する研究者など多くの参加がありました。

最初に、西村英俊 東アジア・アセアン経済研究センター事務総長および石田正美 ERIA 支援室長による挨拶で本シンポジウム開催の意義が述べられ、引き続き、矢野 誠 経済研究所教授による基調講演を行いました。

その後、3つのセッションを行い、各セッションにおけるテーマに基づき4～6名のパネリス



西村事務総長による挨拶



石田室長による挨拶



矢野教授



稲葉理事・副学長による閉会挨拶



基調講演



セッション1のディスカッション



セッション2のディスカッション



セッション3のディスカッション



トによるプレゼンテーションの後、ディスカッションではフロアからの質問や意見を挟みつつ予定時刻を超えて活発な議論が続きました。

最後に、稲葉カヨ 理事・副学長による閉会挨拶があり、盛況のうちに終了しました。



シンポジウムの講演者・登壇者

(大学院総合生存学館(思修館))

[目次に戻る ↗](#)

高等教育研究開発推進センター 第24回大学教育研究フォーラムを開催

3月20日(火)～21日(水)、吉田南総合館および百周年時計台記念館において、第24回大学教育研究フォーラムを開催しました。

初日の「人工知能に代替されない能力とその教育を考える」と題されたシンポジウムでは、北野正雄 理事・副学長の挨拶に続き、松原 仁 公立はこだて未来大学副理事長・教授と河野哲也 立教大学文学部教授が講演し、北野理事・副学長の指定討論の後、パネルディスカッションを行いました。シンポジウムの前に開催されたMOSTフェロー発表会「MEGA CRISIS 巨大危機 IN CLASSROOM—脅威と闘う教員たち—」では、授業や教育実践の中で実際に起こった危機的状況と解決法等が紹介されました。



シンポジウムの様子



パネルディスカッションの様子

部局の
動き

また、初日の午前中には、竹内 洋 関西大学東京センター長（京都大学名誉教授・関西大学名誉教授）による特別講演および、緒方広明 学術情報メディアセンター教授、杉原保史 学生総合支援センター長による学術セミナーを開催しました。

個人研究発表では、大学教育改善の実践研究に関する発表が、ポスター発表80件、口頭発表106件の計186件ありました。フォーラム最後には参加者企画セッション14件が行われ、大学教育の最新の知見と実践に関して、各会場で活発な討論が交わされました。

この大学教育研究フォーラムには、2日間で学内外の大学関係者を主として計755名の参加者があり、盛会のうちに終了しました。



ポスター発表会場

（高等教育研究開発推進センター）

[目次に戻る ↗](#)

寸言

大学について思うこと

岡本 一郎



京大から「寸言」執筆依頼が届いた。「なぜ私に？」大きな疑問符が浮かぶ。筆者の名前を見て、違和感を持つのはもちろん私だけではないだろう。

私の学生時代は昭和50年に始まる。ちょうど大学紛争が収まる時期。下火になったとはいえ、京大はまだまだ頑張っていた。教養の試験時になると必ずストがあった。どんな争点でストをしていたのか、全く覚えていない。ただ単に試験がないことを喜んだ。非常に棲みやすい大学で、レポートさえ出せば、単位はとれた。それをいいことに、教養時代は下宿で好きな本をのほほんと読むことが多かった。

「少なくとも3回生終わるまでには語学と体育だけはとっておけ」これが体育会先輩からの申し送りであった。当時、京大は「学問は自ら学ぶもん。勉強したないもんはやらんでええ」という雰囲気。それが突き放したようでなく、妙にあたたかくほんわか伝わっていた。ほかの大学を見渡してみても、あのような自由な気風があったのは京大だけだったように記憶する。

あの頃キャンパスは汚かった。立て看と張り紙だらけ。時計台は落書きの山。時計台で行く唯一の場所は一階東端の会計窓口。よく督促状をもって授業料を支払った。当時、授業料は安く、確か半期で18,000円。仕送りでもらっても、酒などに簡単に消える。額が額だけに、使い込んで大きな罪悪感はなかった。

先日久しぶりに大学の門をくぐった。昔と比べ、見違えるようなきれいに呆然とした。最高学府としての威厳を感じさせる一方、その静謐さに学びの場であることを強く意識する。しかし、私にはあの猥雑な騒々しさ、いい加減さが妙に懐かしい。

大学で私はたくさんのことを学んだ。学問の香りとそれ以外を。体育会卓球部に所属し、3時から9時までほとんど体育館にいた。共に笑い、共に泣き、青春時代の真っ只中。濃密な時間を過ごした。卓球自体はうまくならなかった。これは運動神経のなせる業。残念ではあるが、諦めざるを得ない。仲間といるだけでうれしかった。練習が終われば、一緒に飯を食い、少し懷が温かいと安い学生酒場へ。その頃百万遍界限には数えきれない飲み屋があった。小銭をカウンターに出し、飲む。もちろん、安いからにはカウンター越しの親父の説教は拝聴しなければならない。仲間と何を話したか、もう覚えていない。楽しかった。今では恥ずかしくなる青臭い議論もたくさんやったように思う。もちろん下宿でも飲んだ。総合大学という性格上、同世代だけとはいえ話し甲斐のある人物が揃っていた。人間として固まっていなかったこの時期、ものの見方が違う人と真正面に議論ができたことは私にとって大きな財産となったようだ。

人それぞれ「おもしろい」と感じるものは違う。「それを見つけないのはあんたや。私らやないで」と京大は無言で語りかけていた。「人生、主体者として生きや」っと。大学受験という18歳の一時期、狭い空から見つけた将来への夢を、一度混沌の中で少しばかり視野を広げて見直す。我慢強かったのか、いい加減だったのか、自由に過ごさせてくれる京大があたたかく見守ってくれていた。そして、我慢強かったがゆえに、何も直接教えなかったがゆえに、多大



な影響を与えた。

今思い返すと、そんな濃密な場を与えてくれた「京大」という存在に改めて感謝したい。高校まででは決して味わえない、教科書以外から学ぶ素晴らしい空間がそこにはあった。「文系学部は社会に必要とされる人材を育てられていなければ廃止」などという功利的な議論を訴える人がいる。人生にとって、本当に大切なのは何であろう。青春の一時期、たくさんの本を読み、人生について真剣に悩み、友と語らい、遊ぶ。いくばくかの専門知識より、こちらの方が私の人生を今大いに豊かにしているような気がする。

(おかもと いちろう、日本軽金属ホールディングス株式会社代表取締役社長、
昭和54年工学部卒業、昭和56年大学院工学研究科修士課程修了)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

流体力学の啓蒙活動

名誉教授 船越 満明



流体力学とは、水や空気などの流れる物質の運動に関する分野である。流体力学の歴史は古いが、日本において流体力学に関連するさまざまな分野の研究者が集まって交流する場として流体力学懇談会が発足したのは1968年、それが改組されて日本流体力学会と名を改めたのは1982年であった。私は、40年あまり前に九州大学に着任してから、京都大学に移った後も含めてずっと流体力学の研究を行い、上記学会にも参加して運営にも多少は関わり、昨年春の定年退職までどっぷりと流体力学につかって過ごしてきた。

そして、定年後にある私立大学において文系の学生を相手に物理関係の講義をすることになり、半年間にわたって流体力学の話をした。この講義では、まず小中学校以来なじみが深いと思われた（静止している流体の）圧力の話をすることにして、重力の下での圧力の高さへの依存性（静水圧）、浮力の生じる理由やアルキメデスの原理なども説明した。

しかし、講義後の学生の感想文を読むと、昔習った内容を懐かしく聞いたという学生がいる一方で、圧力に関する基礎的な事項を理解していない学生がかなりいることがわかった。たとえば、圧力と力の区別がはっきりしない学生や、密閉容器内の静止流体の圧力は（重力の影響を無視すれば）どこでも一定であること（パスカルの原理）や、流体を入れた容器の壁面での圧力は壁面に垂直な方向に働くことを忘れてしまっている学生も少なからずいた。このような圧力に関する基礎的な事項を知らないと、たとえば自動車のブレーキの仕組みが理解できないと思うし、身の回りで見られる現象や道具などの原理について誤った考え方をしてしまうのではないかと、という不安を感じる。

それぞれの分野の最低限のことを知らない人が多くなるのは社会としてまずいのではないかと、という危機感は昔から数学や理科を始めとするさまざまな分野で存在するが、流体力学分野でも上記のような状況だとやはり心配になる。最近は我々のまわりの多くの道具や機器がブラックボックス化しており、「なぜだか知らないが、ここを押すとうまくいく」という製品が喜ばれる傾向にあるが、本当にそれで良いのであろうか。少しは動作原理を知った上で道具や機器を使うのが、後々のために良いのではないかと。そういう意味でも、水や空気を用いた種々の道具や機器の動作原理であり、いろいろな自然現象を説明できる流体力学の基礎知識を、是非、一般の人にも知っておいてほしい、と強く思うようになった。

流体力学の最低限の基礎知識を一般の多くの人に理解してもらうことは、流体力学に深く関わってきた者の使命の一つであり、日本流体力学会でも設立50周年を迎えるにあたって流体力学の啓蒙活動を推し進めていく予定になっているが、私自身も今後はそのようなことにも微力を尽くしたいと思っている。

（ふなこし みつあき 平成29年退職 元大学院情報学研究科教授 専門は流体力学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

京都からの学び

金村 宗



私の所属する総合生存学館（思修館）では、将来のグローバルリーダーを育成すべく、それぞれの専門分野以外の科目（八思と呼んでいます）の履修を学生に求めています。人文学・社会科学・自然科学の各分野に加えて、芸術科目もその一つに含まれています。茶道・華道・書道など学外の先生による芸術科目の講義と実習が頻繁に行われており、学生の引率の折には、私もそのような芸術科目に触れる機会があります。茶道の講義・実習に学生を引率した際、講義の中で「守・破・離」という言葉を幾度となく耳にしました。「守」とは型を身に着ける段階で、師について型を徹底的に学習し習得することです。型を習得できれば次は師から習った型を変えてみる、すなわちその応用を行う「破」の段階となります。ここでは型をベースとしつつも、自分なりの工夫で変化を付け足していくことを行います。さらに進むと「離」の段階となり、師の教えから独り立ちをして、新たなものを創造することを行います。一つの道を究めて新たなものを生み出すには、「守・破・離」のプロセスを踏むことが必要不可欠ということなのでしょう。

今までの私自身の活動の中でも、同じプロセスが繰り返されてきたことに思い至りました。私の専門は社会科学の中の経済学・ファイナンスの分野ですが、この分野での研究プロセスもまさに「守・破・離」でした。まずは先生についてファイナンスの基礎となる理論を徹底的に学び、論文の書き方・プレゼンテーションの仕方など、研究活動の土台となる型について時間をかけて習得する「守」の段階を踏みました。続いて、少し型を崩してその応用として論文を仕上げるという「破」の段階に進みました。ここではファイナンスという学問をベースとしつつそれを応用して、天候に関するリスクマネジメントの問題を解決する方法について検討しました。最後には、エナジーファイナンス・カーボンファイナンスという領域において、新たな研究成果を生み出すという「離」の段階に至ったのです。

「守・破・離」という言葉を知ってから、京都の文化・芸術に触れるたび、伝統を受け継ぎつつも、常に新たなことを生み出し続けておられるところに、躍動感を感じさせられます。新たなものを生み出すという意味では、研究・教育活動も京都の文化・芸術と相通じるものがあるのではないのでしょうか。変化が大きくて急激な時代のなか、高い視座からの解決が急がれるグローバル問題に対峙しつつも、その中で新たな解を見出し、サバイバル（生存）し続けるためには、京都の歴史と伝統というものが大きなヒントとなるのではないかと考えています。実社会のグローバル問題を解決できる博士人材の育成を目指した、総合生存学館（思修館）での研究・教育活動を行ううえで、京都からの学びは常に心強い土台となっています。

（かなむら たかし、大学院総合生存学館（思修館）准教授、専門はファイナンス）

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

丸岡啓二 理学研究科教授が日本学士院賞を受賞

丸岡啓二 教授は、昭和51年京都大学工学部を卒業後、同大学院工学研究科を中途退学、同55年にハワイ大学大学院化学科にてPh.D.を取得しました。昭和55年7月名古屋大学工学部助手、同60年7月同講師、平成2年1月同助教授、同7年4月北海道大学大学院理学研究科教授、同12年4月より京都大学大学院理学研究科教授に就任し、現在に至っています。

今回の日本学士院賞の受賞題目は「キラル相間移動触媒の創製」です。丸岡教授は金属を含まず、かつ精密合成を可能にする有機分子触媒にいち早く着目し、環境調和型のキラル相間移動触媒である「丸岡触媒®(Maruoka Catalyst®)」や、さらに高活性の「簡素化丸岡触媒®(Simplified Maruoka Catalyst®)」の創製に成功しました。その結果、数多くの天然型および非天然型アミノ酸、ジアルキルアミノ酸など、新しい医薬品の開発に向けたキラル物質の選択的かつ大量合成法を確立することができました。たとえば、生理活性アミノ酸であるパーキンソン病治療薬や抗生物質などが容易に合成できます。これらの新しい触媒は、既に試薬化、商標登録され、国内外の大手の試薬会社を通じて広く大学や企業の研究室で使われています。また、10年ほど前から日本企業が非天然型アミノ酸合成の事業化を開始し、現在、国内および欧米の製薬会社から新規医薬原料や中間体用としての非天然型アミノ酸の受託合成を請け負っており、そのうちの幾つかは既に治験薬の段階に至っています。

丸岡教授の卓越した業績に対し、これまでも平成22年中日文化賞、同23年アーサー・C. コープ・スカラー賞、紫綬褒章、フンボルト賞、同24年東レ科学技術賞、同29年高砂香料国際賞「野依賞」など、多数の賞が授与されています。

(大学院理学研究科)

[目次に戻る](#)



堀江 武 名誉教授が日本学士院賞を受賞

堀江 武 名誉教授は、昭和40年京都大学農学部農学科を卒業し、同年農林省農業技術研究所物理統計部研究員として採用、同52年農林省農業技術研究所物理統計部主任研究官、同56年京都大学農学博士の学位を授与され、同58年農林水産省農業環境技術研究所環境資源部主任研究官、同59年農林水産省北陸農業試験場環境部農業気象研究室長を経て、同60年京都大学農学部教授に就任されました。その後、平成3年京都大学農学部附属農場長・

亜熱帯植物実験所長、同9年京都大学評議員の要職を務められたのち、同18年に定年退職され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。また、定年退職後は独立行政法人農業・食品産業技術総合研究所理事長に就任され、同26年まで務められました。



栄
誉

今回の日本学士院賞の受賞題目は「アジア稲作に及ぼす地球温暖化の影響に関するシステム農学的研究」です。堀江名誉教授は、アジアの基幹食料であるコメの生産に及ぼす地球温暖化の影響と適応策を明らかにする目的で、アジアの主要な稲作気候帯をカバーする水稻の品種・地域比較栽培ネットワーク試験、CO₂濃度を富化した温度傾斜型温室での水稻に対するCO₂濃度と温度の複合処理実験などによって得られたデータを解析し、大気環境が水稻の生育・収量に及ぼす影響を高い確度で予測する数理プロセスモデルの開発に成功しました。このモデルに、大気大循環モデルが予測する大気CO₂濃度の倍増時の気候値を入力し、アジア各地域の水稻生産に及ぼす地球温暖化の潜在的影響を明らかにしました。さらに、高CO₂濃度・温暖化気候に高い適応性を持つ品種開発の目標形質とその遺伝資源を提示しました。これらの研究成果は、IPCC報告書などを通じて、温暖化防止の国際世論の形成に貢献するとともに、内外の様々な研究機関で地球温暖化と食料問題の解決を目指す研究に活用されるなど、先導的役割を果たしてきました。

また、堀江名誉教授は、アフリカ稲センター（WARDA）の理事、国際稲研究所（IRRI）のコンサルタント、「地球温暖化と農業・食料安全保障」などの国際プロジェクト研究の組織委員、Field Crops Research, Agricultural Systems など多くの国際学術誌の編集委員（長）として国際農業研究に貢献するとともに、その卓越した業績に対し、これまでも昭和61年日本農業気象学会賞、平成11年日本農学賞、読売農学賞、同15年アサヒビール地球環境科学研究賞など、多数の賞が授与されています。

（大学院農学研究科）

[目次に戻る ↗](#)

話題

医学部附属病院が ISO9001:2015 の認証を取得

医学部附属病院は、3月14日（水）に国際標準化機構（ISO）が定めた品質マネジメントの国際規格「ISO9001:2015」の認証を取得しました。

医学部附属病院は、品質方針を「患者さん中心の開かれた病院として、安全で良質な医療サービスを提供するために職員全体で継続的な改善活動を重ねていく」とし、ロードマップに基づいて、2017年1月から準備を開始しました。同年5月までに医学部附属病院に内部監査員を200名養成し、6月から9月に各部門等に対して内部監査を実施しました。11月に外部審査機関による第一段階審査、2018年1月に第二段階審査を受審し、3月14日にISO9001:2015の認証を取得しました。

医学部附属病院では、職員全体でPDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルをまわし、継続的な改善活動に取り組む仕組みを構築しました。患者さんに一層安全で満足いただける医療サービスの提供のため、今後も品質マネジメントシステムの改善を続け、社会に貢献してまいります。

（医学部附属病院）



ISO9001:2015 の認証書

[目次に戻る](#)

宇治おうばくプラザで「第9回たそがれ花見コンサート」を開催

宇治地区では4月6日（金）、宇治おうばくプラザきほだホールにおいて関西で活躍する4名の弦楽奏者（脇坂亮平氏、高木 玲氏、岡本明子氏、大槻未弦氏）と、東宇治中学校吹奏楽部による「第9回たそがれ花見コンサート」を開催しました。

このコンサートは、おうばくプラザの広報と地域へのサービスの一環として毎年春に開催しているもので、連携協定を締結している宇治市より山本正 市長も来場され、ご挨拶いただきました。

脇坂氏、高木氏のヴァイオリン、岡本氏のビオラ、大槻氏のチェロの弦楽四重奏による春の曲を中心とした演奏と随所にトークを交えた親しみやすい内容で、来場者は熱心に耳を傾けて



宇治地区世話部局長 辻井敬 山本宇治市長による挨拶
巨化学研究所長による挨拶



脇坂氏、高木氏、岡本氏、大槻氏による弦楽四重奏

話題

いました。

また、地域交流の一環として出演いただいた東宇治中学校吹奏楽部のアンサンブルと全員での演奏も大変好評でした。

当日は、あいにくの雨模様でしたが約250名の方に来場いただき、地域の春の恒例行事として、今後も継続を期待する声が多くありました。



東宇治中学校吹奏楽部の演奏

(宇治地区事務局)

[目次に戻る](#)

化学研究所所蔵の「モノビニルアセチレン法による合成ゴム」が化学遺産に認定

化学研究所所蔵の「モノビニルアセチレン法による合成ゴム」が、公益社団法人日本化学会の「化学遺産」に認定されました。日本の化学と化学技術に関する歴史資料の中で特に貴重なものが、化学遺産に認定されています。

天然ゴムは重要な工業材料ですが、原産地は東南アジアに限定されています。そのため、第一次世界大戦中の海上封鎖によって天然ゴムの入手が困難となったドイツで、天然ゴムに匹敵する高性能の合成ゴムの開発が始まりました。その後、各国で多種の合成ゴムが開発されましたが、その鍵は、合成ゴムの原材料のひとつであるブタジエンの工業的合成でした。

工学部の古川淳二 名誉教授は、第二次世界大戦開始前に、この工業的合成について画期的な「モノビニルアセチレン法」を開発していましたが、さらに、この方法で合成したブタジエンとアクリロニトリルを原材料としてNBRと呼ばれる合成ゴムを量産する研究に着手し、1942年には、化学研究所において日産200kgの工業化試験に成功しました。この時のNBR試料が今回の化学遺産です。工業化試験の設備は、その後、住友化学工業新居浜工場に移設され、日本におけるNBRの工業的生産の礎となりました。



化学遺産に認定された合成ゴム試料とその説明資料

話題

化学遺産認定証の贈呈式は、日本大学理工学部船橋キャンパスで開催の日本化学会第98春季年会の期間中の3月21日に行われ、時任宣博 化学研究所長と高木康博 東京農工大学科学博物館長に認定証が手渡されました。



左から、高木館長、山本 尚 日本化学会会長、時任所長



認定証

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

第13回 TOKYO 漢籍 SEMINAR の開催報告

人文科学研究所は3月12日(月)、東京の一橋講堂中会議場において、第13回TOKYO 漢籍 SEMINARを開催しました。第13回となる今回は、計157名が参加しました。

本セミナーの目的は、人文科学研究所が80年余にわたって蓄積してきた中国学研究成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものです。

セミナーは岡村秀典 東アジア人文情報学研究センター長の開会挨拶に始まり、「中国近代の巨人とその著作」をテーマに、村上 衛 人文科学研究所准教授「士の「家計簿」—曾國藩の著作より」、森川裕貫 同助教「蔣介石と『中国の命運』」、石川禎浩 同教授「毛沢東—書家として、詩人として」の3講演を行いました。終了後のアンケートでは、身近な中国近現代史の一コマがリアルでした、家計さらに政治家の著作のような個人性の強い資料によって歴史上の出来事の詳細が感じられるところが面白かった、といった感想が寄せられるなど、



岡村センター長



村上准教授



森川助教



石川教授

話題

参加者にとって有意義な機会となりました。



セミナーの様子

(人文科学研究所)

[目次に戻る](#)

京都大学研究資源アーカイブが新たな資料を公開

このたび、京都大学研究資源アーカイブは、新しく二つのデジタルコレクションを公開しました。

●京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934，1987.

URL = <http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/activity/application/digital-collection/#25>

[概要]

大阪府高槻市阿武山古墳の1934年の発掘調査に際し、京都帝国大学文学部考古学教室および阿武山観測所（志田順博士）により撮影された写真資料。腐朽せずに出土することがきわめて稀な夾紵棺の貴重な出土状況記録であり、原資料が再埋葬されている現況において最も重要な二次資料です。また、レントゲンフィルムは日本考古学にX線が利用された最初の事例であり、学史的にもきわめて重要です。考古学研究室保管のガラス乾板14枚以外の資料は地震観測所で保管されていたが、1982年に再発見された後、1987年に修復されました。

[出所・作成]

京都大学大学院文学研究科考古学研究室；京都帝国大学理学部附属阿武山地震観測所，京都帝国大学文学部考古学教室



[写真内容] 玉枕レントゲン2. 箱4 (茶1) -3(1), 京都大学考古学研究室写真：阿武山古墳調査，1934，1987. (FoLs PIC 2017/6), 京都大学 (京都大学研究資源アーカイブ). 京都大学総合博物館・京都大学大学院文学研究科考古学研究室収蔵.

話題

[資料年代]

1934 年, 1982 年～1987 年

[公開年]

2018 年

[数量]

ガラス乾板写真 36 枚, プリント写真 13 枚, レントゲンフィルム 11 枚

[メタデータ]

67 レコード

●京都大学人文科学研究所写真：阿武山古墳調査, 1934.

URL = <http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/activity/application/digital-collection/#26>

[概要]

大阪府高槻市阿武山古墳の1934年の発掘調査に際し、東方文化学院京都研究所の羽館易により撮影された写真資料。対象資料は、腐朽せずに出土することがきわめて稀な夾紵棺の貴重な出土状況記録で、原資料が再埋葬されている現況において、最も重要な二次資料です。

[出所・作成]

京都大学人文科学研究所；東方文化学院京都研究所・羽館易（撮影）

[資料年代]

1934 年

[公開年]

2018 年

[数量]

紙焼き写真 20 枚, 紙焼き写真貼付け台紙 7 件

[メタデータ]

28 レコード



[紙焼き写真] 石室全景（北方より撮影）。日本 50-3, 京都大学人文科学研究所写真：阿武山古墳調査, 1934. (IRHu PIC 2017/7), 京都大学（京都大学研究資源アーカイブ）。京都大学人文科学研究所所蔵。

京都大学研究資源アーカイブは、京都大学における教育や研究のプロセスでつくられた資料群を体系的に収集・整理・保存し、「研究資源」として学内外で利用可能にする取組みです。詳しくはウェブサイトもご覧ください。

【京都大学研究資源アーカイブ】

URL = <http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

（総合博物館）

[目次に戻る ↗](#)

話題

学部生全員が、胸骨圧迫とAEDの使い方を学びました！

本学では2015年度から全学部新生に、2016年度からは大学院新生および留学生に対しても40分間の心肺蘇生・AED講習会を実施しています。今年度も4月3日(火)から4月5日(木)に学部新生および大学院新生に、4月19日(木)には留学生を対象として講習会を実施しました。この取り組みを始めてから今年で4年目、この4月で本学のほぼすべての学部生が胸骨圧迫やAEDの使い方を学んだことになります。一方、大学院新生および留学生については、まだすべての学生が参加するには至っていません。

写真は、講習会で胸骨圧迫の実習を行っている一場面です。新生たちは、ガイダンス時、隣に坐った同級生と二人ひと組になり、胸骨圧迫とAEDの使い方を学ぶためのトレーニングキット「あっぱくん®」を使って実習を行いました。講習会にはのべ200人以上の教員が参加し、新生は先生たちに声をかけてもらいながら、胸骨圧迫とAEDのトレーニングを楽しく行いました。

入学時に実施しているこの講習会の目的は、心肺蘇生のスキルを獲得することだけではありません。京都大学に入学してきた学生一人ひとりに、「いのち」の尊さを考えてもらい、また、困っている人を見かけたら声をかけ手助けができる心優しい人間になってもらいたい。そんな願いを込めて、入学ガイダンスの中でこの「いのち」の教育を行っています。昨年度からは、講習を受けた学生が、人が倒れている現場に遭遇した際に何らかの救命処置を行ったかどうかの追跡調査を開始しました。人が倒れている場面に遭遇した際、約半数の学生が何らかの救命処置を行っていることが分かり、あらためてこの講習会の意義の深さを感じています。

我々は、「いのち」の教育を受けた学生が京大を巣立ったのち、優しい気持ちを持つ社会の真のリーダーとして活躍していくことを祈って、これからも継続的に講習会を実施していく予定です。それは、大学として果たすべき社会的責任のひとつでもあります。

なお、4月の一連のガイダンスの中で実施した心肺蘇生・AED講習会は、国際高等教育院の統括のもと、医学研究科人間健康科学系専攻、環境安全保健機構、医学部附属病院救急部、同病院総合臨床教育・研修センター、理学研究科、人間・環境学研究科ほか多くの教員によって運営されました。教員各位の熱意と協力に心より感謝します。



2人組になり胸骨圧迫の練習を行っている場面

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、坂東尚周 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。

坂東 尚周 名誉教授

坂東尚周先生は、平成30年2月7日逝去されました。享年84。

先生は、昭和31年京都大学理学部を卒業、昭和33年同大学院理学研究科修士課程を修了され、日本化薬株式会社に入社されました。昭和36年京都大学理学部助手に採用され、昭和39年同化学研究所助手、昭和43年助教授、昭和51年に附属新無機合成開発施設教授に昇任されました。昭和57年より部門施設統合により設置された新機能材料研究部門、平成4年からは大部門化により生まれた無機素材化学研究部門を担当されました。平成9年3月停年退職され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。退職後は、平成12年4月から平成17年3月まで岡山理科大学工学部教授に就任され、無機合成化学分野の研究と教育に力を注がれました。



先生は、化学組成、結晶構造、さらに微細構造を精密に制御した遷移金属酸化物を中心とする物質群を気相、液相、固相から合成する新たな手法を開発され、さらに合成した物質の機能性を解明されるなど、無機合成化学の分野を先導されました。特に化学輸送法による酸化バナジウムや酸化チタンの単結晶の合成、反応性蒸着法による高温超伝導銅酸化物の単結晶薄膜の合成とその成長機構の解明は先駆的な研究成果として世界的に高く評価されました。

これらの業績に加え、文部省学術審議会専門委員、通産省工業技術院産業技術審議会専門委員、科学技術庁客員研究官、日本学術振興会産学協力研究委員会委員、社団法人粉体粉末冶金協会会長を務められ、広くわが国の学協会発展に貢献されました。

(化学研究所)

[目次に戻る](#)